

南山宗教文化研究所 主要プロジェクト報告

P・スワンソン

Paul L. SWANSON

『研究所報』には、南山宗教文化研究所で実行中の研究プロジェクトについての報告が掲載されることがよくある。今年最近のプロジェクト——完成間近のもの、進行中のもの、これから実行するもの——を簡単に説明、報告することにした。(以下、敬称略。)

1. 完成間近のプロジェクト—

「脳科学とこころ」と「日本哲学」

「科学・こころ・宗教」(Global Perspectives on Science and Spirituality [GPSS])の最終的な国際会議が「脳科学と宗教——アジアからの見解」(“Brain Science and Religion: Some Asian Perspectives”)のテーマで2010年11月28日～29日に南山宗教文化研究所で開催された。詳細な報告に関しては昨年『研究所報』(寺尾寿芳著、20号、3-11)を参照されたい。この会議で報告されたいくつかの論文——入来篤史、CHAN Ying Shing、舟橋新太郎、William WALDRON、Sangeetha MENONとBernard SENEAL——に加えて、「こころ」の意味に関するThomas KASULISの論文からなる論文集が現在、編集の最終段階に入り、近日中に刊行される予定である。書籍をご希望の方は研究所にお問い合わせいただきたい。なお内容はPDFファイルで、研究所

のホームページで提供される。GPSSの日本語ブログは、オンライン(<http://gpss-japan.cocolog-nifty.com/blog/>)で提供しているが、今後「脳科学・こころ・宗教」のテーマに研究所としてどのように対応するかは未定である。

もう一つ長年続いた研究プロジェクトとして、ハイジック所員を中心とした「日本哲学」プロジェクトがある。このプロジェクトの集大成として英語の『日本哲学ソースブック』がハイジックに加えてThomas KasulisとJohn Maraldoを共編者として2011年6月に出版予定である。この大著は長年、世界中の「日本哲学」の研究者が協力して出来上がったもので、「日本哲学」のみならず「哲学」とはなにかを問い直す、今後の日本哲学研究に欠かせない資料集である。今年の英語の*Bulletin*と所報の両方に、ハイジックがその長い道のりについて「体験談」を寄せている。

2. 進行中のプロジェクト—

「カリスマ刷新運動の国際的研究—基礎文化と外来文化の葛藤と融合」

南山大学国際化推進事業である「カリスマ刷新運動の国際的研究」が現在、二年目に入っている。研究事業計画書にはこのプ

プロジェクトの内容と目的をこのように説明している：

日本の聖霊運動やカリスマ刷新運動は、従来から研究されてきているが、それほど注目されることはなかった。今回、南カリフォルニア大学が主導してアジア、ラテンアメリカ、アフリカ、旧ソビエト連邦をターゲットに大がかりな調査（Pentecostal and Charismatic Research Initiative）が行われることになり、宗教文化研究所はその拠点候補として応募した。（詳細は以下を参照。）この機会をとらえて、改めて日本を中心とするこれらの運動の台頭や展開について国際的に韓国やブラジルなどの状況などとの比較を交えて大がかりな調査研究を行おうとするものである。

この研究プロジェクトの背景には、以下のような現状認識がある。

- ◆ 現代世界におけるキリスト教全体の動向のなかで、民衆的、体感的、体験的なプロテスタントイズムの流派であるペンテコスタリズムが、この20年ほどの間、特に大きな成長をしている。

そのなかでも、韓国で形成された諸教会の、世界的な伝道運動が、きわめて活発である。

カトリック教会においても、ヴァチカン中心の位階制的権威構造は不変であるにしても、民衆的、体感的、体験的な、カリスマ運動が、一定の役割を果たしている。

- ◆ 現日本のキリスト教においても、ペンテコスタリズムは、特に、移民社会を中心に、活発に活動しているが、旧来の在来宗教中心の宗教研究からは、あまり研究されてこなかった。
- ◆ したがって、日本を中心に、日韓の比較研究、また在日ブラジル人等の調査

研究を実施することは、早急に開始する価値がある。

（英文は多少、表現が違うので、*Bulletin* (35号、2011)を参照されたい。）

研究所員にとってこのテーマはあまりなじみのないものだったので、プロジェクトを開始する前に2009年7月24日に「日本におけるカトリック『聖霊による刷新』運動の台頭と展開」について上智大学の中村友太郎に講演をお願いした。この懇話会によって、このテーマにはいろいろな側面があり、多様な方面から取り上げる必要があることが明確になった。

その後、このテーマに関連して以下の懇話会を開催した。

池上良正（駒澤大学）「近代日本における聖霊派の系譜——初期ホーリネスを中心に」、2010年2月18日

山田政信（天理大学）「デカセギとペンテコステ運動——ブラジル系プロテスタント教会を事例に」、2010年6月10日

鐸木道剛（岡山大学）「アイコンとシャーマニズム?」、2010年9月30日

淵上恭子（本研究所属研究員）「祈祷院運動」、2010年10月15日

このテーマを国際的に扱い、比較研究することを目指して、2011年1月20-21日に研究所で“Pentecostalism and Charismatic Movements”をテーマで国際ワークショップを開催した。海外から発表者3人を迎え、刺激的な発表が英語でなされた。

1. Rafael SHOJI, Pontifical Catholic University of Sao Paulo, “Brazilian Pentecostalism in Japan: Tropical Plants in the Swamp (The “Rush Hour of Spirits” in Brazil from the 1980s).” [日本におけるブラジル系のペン

テコスタリズム]

2. Alena GOVOROUNOVA, Kansai University, “What is Specifically Russian about Russian Pentecostalism? Examining Historical, Socio-Economic, and Cultural Peculiarities of the Pentecostal/Charismatic Movements in Russia.” [ロシア・ペンテコスタリズムの特徴]
3. Andrew Eungi KIM, Korea University, “Shamanism and Korean Pentecostalism: A Convergence of Shamanism and Pentecostalism.” [韓国ペンテコスタリズムとシャーマニズム]

活発な議論の結論として、このプロジェクトの最終的な国際会議のテーマは「東アジアにおけるシャーマニズムとペンテコスタリズム」にすることになった。国際会議にはいままでの参加者に加えてさらに国内外からの参加者を招待し、2012年1月に開催し、研究結果を出版する予定である。それまでに引き続きこのテーマで懇話会などを開催する予定である。

3. 今後から実行のプロジェクト—宗教研究の国際化推進のための科学研究費

平成23～25年度科学研究費補助金の申請が日本学術振興会に提出され、2011年春にその採択が決定された。テーマは「宗教研究の国際化推進のための拠点形成と総合的な研究史調査」であり、研究代表者渡邊学のもとで実行される。この目的を達成するために、4つの研究テーマとチームが形成される（くわしくは渡邊の論文を参照さ

りたい）。

1. 神道概念の再検討（奥山倫明、Mark McWilliams）
2. 「近代仏教」の再検討（Paul Swanson, 林淳、大谷栄一）
3. 新宗教研究の再検討（渡邊学、Benjamin Dorman, Mark Mullins, Ian Reader, Erica Baffelli）
4. 諸宗教間対話の実践と再検討（James Heisig, 金承哲、Aasulv Lande, Henk Vroom）

また、この研究者チームをとおして、「宗教研究の国際化推進」の具体的な活動としておおむね4つの活動を実施する予定である。

1. 研究成果の出版（英文・和文著作の刊行、英文研究誌特集号を編集）
2. 日本における宗教研究の基礎的資料のデジタルデータ（PDF）化とデータベース化とその公開
3. 国際学会および国内学会での発表
4. 国際シンポジウムの日本での開催などによって、日本の宗教研究の国際的なプレゼンスを高め、かつ宗教研究を振興してゆく。

南山宗教文化研究所では、このような研究や活動に関してすでに長い歴史と経験をもっている。これからも国際的・学際的な研究活動を、さらに拡大するように努力していきたい。

ぼーる・すわんそん
南山宗教文化研究所第一種研究員